

[翻 訳]

ニールス・ボーアの国連への公開状

——1950年6月9日——

藤 田 秀

訳者まえがき

1985年10月1, 2, 3, 4日にわたって、千葉大で日本物理学会が開かれた。10月2日(水)の夕方、薄暗くなった頃、物理学史の面々が10人程集まって、一緒に夕食を食べにゆく相談をしていた。そこに、玉木英彦先生が来られて、「フジタクンに話をしたかったのだけど。まあいいや」と言って一人で帰りかけられた。先生は、何をおっしゃりたかったのだろうと思い、10メートル程後を追って、「先生何でしょうか」と質問した。すると、「ニールス・ボーア(註:原子物理学者)の仕事を手伝って欲しくないか。難しいよ」とのことであった。月火水は出講日、木曜は父を病院につれてゆく日なので、金曜がいいと申し上げておいた。

10月17日(木)夜、玉木先生からお電話を頂いた。いよいよ始めたいとのことであった。10月26日(土)、東大教養学部基礎科学科の教官控室(以下駒場と略す)で、「ニールス・ボーアの国連への公開状」(英文)のコピーを頂いた。これを訳して世に出したいから、下訳をして欲しいとのことであった。ザッと見たところ、3日もあれば終るように思われたので、軽い気持でお引き受けした。ところが、家に帰って読んでみて驚いた。何を言っているのか、テンデ判らないのである。1回目は夢中で読んだ。何のことか、全く判らない。今さら、先生判りませんでは済まされぬ。気を取り直して読み返した。2回目は、薄ボンヤリと輪郭が浮び上って来た。どうやら、米ソ問題を論じているらしい。3回目によっと、これはひょっとすると、「聖賢の言葉」ではないかと思うようになった。ともあれ、第1回分として少し訳した原稿を持ってゆき、11月1日(金)、仁科記念財団(以下駒込と略す)の朝永記念室の一隅で、先生に下訳と原文とをつき合せて頂き、文章を直して頂いた。

このようにして苦行が始まった。11月16日(土)駒場、11月22日(金)駒込、11月30日(土)駒場、12月14日(土)駒場、12月27日(金)駒込、1986年1月16日(木)駒場、1月31日(金)駒場、と会合を重ね、日本語文を訂正して頂いた。この間、これと併行して、毎週月曜日に、仁科記念財団の一室に、玉木

英彦(仁科記念財団常務理事)、島村福太郎(和光大)、竹内一(理研)、矢崎裕二(北多摩高校)の諸氏が集まって、玉木先生と私で作った日本語の文章を、さらに日本語として眺める見地から修正する作業が続けられていた。

4カ月かかって、遂に和訳の全部が終った。時あたかも春休み中であつたので、2月10日(月)、2月17日(月)、3月24日(月)、私も駒込に集まって、全員5名で日本語の推敲を重ねた。この作業は、案外と時間がかかった。昼食に出るお寿司と、3時のオヤツとが楽しみであった。三稿までやった。それにもかかわらず、訳文は大変に読みづらい。これはもう原文のせいである。原文は例えば、動名詞で始まり、中に関係代名詞があつて、その中の言葉をまた他の関係代名詞で補充する、といった式のものである。ニールス・ボーアという人は、一体どんな言葉を日常話していたのであろうかと思った。

この公開状の要旨は、一言で言うと、「原爆製造の秘密を、ソ連側にも伝えよ」ということである。それが、第2次世界大戦後の、世界平和の基礎になる、という論法である。残念ながら現実には、全くその逆を行った。この公開状が出されてから僅か16日後、1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発した。今また、核実験の停止、SDIの開発など、世界状況はとげとげしくなっている。このような時にこそ、この一見ユートピア論と見える公開状を、読み直してみる価値があるかと思われる。難澁な訳文であるが、読者諸氏の御忍耐を期待したい。

また、この訳文は、本来、玉木英彦、島村福太郎、竹内一、矢崎裕二ら4名との共訳であるのだが、学内の都合により、藤田1名の名で発表したことをつけ加えておく。

(1986年11月30日 文責 藤田 秀)

私は、世界のあらゆる各国共通の問題に対して、諸国間で一層協力しあうようにという目的で作られた機関にあてて手紙を書いて、科学と技術の最近の発展の結果必要となった国際関係の調整について、考えを述べたいと思います。この科学と技術の発展は、人類が幸せになることを、大きく約束したのであり

ますが、それと同時に、恐るべき破壊的手段を人類の手にゆだねたのでありまして、我々の全文明は、これによってこの上ない重大な難問に直面したのであります。

私は、戦時中に、米英合同原子力計画に参加した結果、それらの政府に対して、この計画が成功した暁に、諸国間の相互関係に発生するであろう希望と危険性について種々意見を述べる機会を得ました。各国の安全を保証しつつ原子力を利用する方法について、国連内の交渉が早急に結果を生む可能性がまだあった間は、私は、この問題について、公的な討論に加わる気がありませんでした。しかしながら、現在の危機的状況においては、私の見解と経験とを述べることによって、国際関係にきわめて深刻な影響を与えるこの問題について改めて議論が起るようになることが出来るのではないかと考えております。

私は、原子力開発の経過を逐一直接に知ることの出来た一科学者であります。初期の段階に私が深く心に抱くようになった見解を述べるにあたって、完全に自分の責任において行動しているのであって、いかなる国の政府とも相談したものではありません。この報告と考察の目的は、科学の進歩がもたらした、人類のもつ資源の革命によって諸国間の協力と理解のための比類のない機会がつけられたことを指し示すことであり、またこれまでは成功しなかったが、その機会がまだ存在し、あらゆる希望と努力とが、それを現実化することに集中されねばならぬということを強調するためであります。

科学の最近の急速な発展にとって、殊に原子の構造と性質についての大胆な探求にとっては、国際協力がかつて例を見たことがない程の広がりや強さでなされるのが、決定的に重要でありました。世界中のあらゆる国の科学者の間で、経験や着想を交換することは非常に有益でした。このことによって、各人は皆非常に勇気づけられ、そして、諸国間の一層緊密な接触によって、文明の進歩のためにあらゆる面で協力してゆけるという希望を強めたのです。

しかしながら、何人もいろいろな国の文化的伝統や社会的組織の相違に直面すると、あまたの人類共通の問題に対して、共通の取りあげ方を見つけるのが、いかに難しいかということを痛感します。第2次世界大戦の前夜の高まる緊張は、上記の困難をきわ立たせ、諸国間の自由な交流に沢山の障壁を作ったもの

でした。それにもかかわらず、科学の国際協力はやはり科学の発展における決定的な要素であり、それは戦争が勃発する直前までに、原子エネルギーを巨大なスケールで解放する見通しを与えたのでした。

この発展に取り残されるのではないかという心配にとりつかれて、各国は、このエネルギーを軍事目的のために用いる可能性をひそかに探求しました。米英合同のプロジェクトのことは、私がドイツによる占領下のデンマークを1943年の秋に脱出して、英国政府の招待で英国に来るまで、知りませんでした。その時に、私はこの大きな事業について秘密を知らされましたが、その事業は、当時かなり進展しておりました。

もちろん、この原子力のプロジェクトに関係している人はみんな、もしもこの事業が達成されたばあいに、人類が直面するであろう重大な問題があるということに気づいておりました。原子力兵器がこの戦争で演ずることになるであろう役割は別としても、恐るべき破壊力をもつ新しい手段の乱用を防ぐための方策が、全世界的に合意され実行されない限り、世界の安全に対して、永続的かつ重大な危険が生じるであろうことは明らかでした。

この重大な問題について言えば、私は次のような考えをもっておりました。すなわち、文明に対するこのような不吉な脅威に対して、あらかじめ手を打っておくために協力して努力することの必要が、まさに国際的な対立を取り除くための比類のない機会を提供するものであり、とりわけ、戦時中連合した諸国間で、ともに将来の安全保障を得るための最善の方法について、早期に協議することは、相互の信頼の雰囲気を作ることに決定的に貢献し得るであろうという考えです。この相互信頼は、他の多数の共通の関心事項について協力するためにも必須でしょう。

1944年の初めに、私は上記の見解を、米国および英国政府に注目させる機会を与えられました。当時、真剣な審議の対象となった見解のいくつかを、ここに記録しておくことは、国際的理解にとって有意義でしょう。この目的のために、メモランダムから引用しておきます。このメモランダムは、1944年8月に、ルーズベルト大統領と行うことができた長い会談のための基礎資料として、彼に提出したものです。1944年7月3日の日付のあるこのメモランダムは、原子

力プロジェクトの科学的背景に関する、今日では周知のことの概観のほかに、プロジェクトが完成された際に生じるであろう政治的結果に関する次のような文章を含んでいます：

「ここ数年のうちに来る、プロジェクトの結果について見渡すことは、たしかに何人の想像も絶することでしょう。そこでは、長い眼で見れば、利用し得る巨大なエネルギー源が、工業と運輸とを革命的に変えると期待できるでしょう。しかしながら、近い将来に重要性をもつ事実は、比類のないほど強力な兵器が作られて、それによって戦争の将来の様相をすっかり変えてしまうということです。

その兵器がいかにか早く完成され、この戦争でどのような役割を演ずるかという問題を別としても、この事態は緊急な注意を必要とする沢山の問題を引き起こします。たとえば、新しいアクティブな(巨大なエネルギーを放出できる)物質の使用の管理について何らかの同意が近いうちに得られないならば、一時的利益がどのように大きなものであろうとも、人類の安全に対する永続的脅威の重大さとはくらべものにならないでしょう。

原子エネルギーを巨大な規模で解放する可能性が見えて来ると、管理の問題について、当然沢山の考えが出されました。しかしながら、これに関連した科学上の問題が研究されればされるほど、いかなる通常の種類の手段も、この目的のためには十分でなく、とくに、このような恐ろしい性格の兵器について、将来競争が起きるであろうという恐るべき見通しは、真の信頼関係についての全世界的一致なしには避けることが出来ない、ということがますます明らかとなりました。

このことに関して、わけても次のことが重要であります。この事業は非常に大きい、将来予想されるものはもっと遙かに大きいということ。そしてまた、作業の進展によって、アクティブな物質の製造を容易にすることの、また、アクティブな物質の効果を強化することの新しい可能性もたえず見つかっているということです。

したがって秘密裡になされる競争を防ぐには、次のような譲りあいが必要で

す。すなわち、情報を交換し、工業的努力の成果と軍事的準備とを、徹底的に公開すること——それと引きかえにすべてのパートナーに未曾有の強烈な危険に対する共通の安全の保障が確保されるのでなくては、到底考えられないほど徹底的に公開することです。

効果的管理手段を確立することは、もちろん技術的にも行政的にも複雑な問題を伴うこととなるでしょう。しかしながら、ここでの議論の要点は、つぎのようです。すなわちこのプロジェクトの完成は、国際関係の諸問題の新しい取りあげかたを必要とすると思われるばかりでなく、またその完成は相互信頼の緊急性のゆえに新しい取りあげかたを促進するであろうということでありま

す。ほとんどすべての国が自由と人間性のための死闘に没頭している現在は、一見したところでは、このプロジェクトに対して加えられるいかなる調整にも最も不向きであるように思われるでしょう。侵略者たちの最初の計画は挫折しており、彼らが最終的に降伏するであろうことは確実のように見えるとはいえ、勢力はまだ軍事的に強力であるのみでなく、また彼らが降伏したとしても、侵略に対抗して連合している国々は、社会的並びに経済的諸問題に対する相容れない態度のために、重大な不一致をきたすことが避けられないでありましょう。

しかしながら、もっと詳しく考察すると、このプロジェクトが信頼関係を高める手段となり得るといふ潜在的可能性が、まさにこのような事情の下にあって、最も現実的な重要性をもっていると考えられます。そればかりでなく、現在の状況は、あらゆる点で、全く比類のない可能性を提供しており、それは、戦況のこれ以上の進展と、新兵器の最終的完成を待っている、失われてしまうでありましょう。」

「これらの起こりそうなことを考えると、現在の状況は、これまで人類の手がとどかなかつた自然の強力な力を支配する努力において、幸いにリードを保っている側が、早い時期にイニシアチブをとるには、絶好の機会を提供しているように見えます。

直接的軍事目的に対する、プロジェクトの重要性をそこなわずに、しかし、強力な兵器に関する宿命的な競争に先んじるような、イニシアチブがとられる

べきです。それは、これからの世代の運命がその調和的提携にかかっている勢力の間に起こり得る、あらゆる不信の原因を根絶することに役立つであります。

実際、適切な管理の取りきめの成立のために、それぞれの国がいかなる譲歩を行う用意があるかという問題が国際的連合体で取り上げられるとき、初めて、各参加国は、他の国の意図の誠実さをたしかめることが出来るでしょう。

もちろん、責任ある政治家だけが、現実の政治的可能性について洞察することが出来るであります。しかしながら、国際連合体の中のすべての側が一致して表明している将来の調和的な国際協力への期待と、世間はまだ知らないが科学の進歩によってもたらされたこの比類のない機会とが見事に結びあわせるとしたら、非常に幸運なことであると思われま。

実際、多くの理由がつぎのような信念を正当化しているように思われます。その信念というのは、そのプロジェクトの完成にともなう有望な工業的開発にいかなる国も参加できるようにしながら不吉な脅威に対し共通の安全を確保するというやりかたは歓迎され、それに必要な徹底した管理手段の実施への忠実な協力で応じられるであろうという考えであります。

まさにこのような点について、有効な支持を、全世界的な科学的協力が与えるにちがいません。この科学的協力は、長年の間、人類の共通の努力に対して、明るい約束を具現して来たものであります。このような素地があるおかげで、異なる国家の科学者間の個人的なつながりは、非公式の予備的な接触を成り立たせる手段を提供しさえするでしょう。

あらためて言うまでもなく、上のような指摘や提案は、政治家が関係国のすべてを満足させる措置を決めるための手続きのデリケートさや、困難さを、低く評価するものではありません。これはただ、このプロジェクトを、共通の目的にとって永く続く利益に変えようとする努力を容易にすると思われる観点のいくつかを示すのが目的であります。」

このプロジェクトの秘密性によって、非常に深く国際関係に影響を与える事柄

について、一般人が知ったり、公開討論が行われたりするものが妨げられた結果、政治家の仕事はもちろん複雑さを増しました。提案しているようなイニシアチブをとるために必要な諸決定が、並々ならぬものであることを全面的に認めつつも、原子力の開発によって持ち上がった問題が、連合国の戦後世界のための計画に取り入れられなければ、大きな機会が失われるであろうと、私には思われてならないのです。

この観点は、管理手段の技術的問題をさらに論じている補助覚書中に、詳しく述べてあります。とりわけ私が強調しようとしたのは、共通の安全のために現在明らかに必要な相互的公開性こそが、国際的理解を促進し、永続的協力のために、道を開くものであるという点であります。この1945年3月24日付の覚書には、今日では興味のない事項の叙述のほかに、以下のような文章が含まれています。

「何にもまして、次のことを認めなければなりません。すなわち、現在の状況は、開発のほんの初めの段階にすぎず、極めて近い将来に、アクティブな物質を生産する方法を簡単化する手段が発見され、その効果は強化されるであろうこと、その結果工業的資源を持っている国ならいかなる国であれ、従来の想像を遙かに超えた破壊力を駆使出来るようになるだろうということであります。

したがって、そのような恐ろしい兵器の不幸な競争が起こらないようにする手段をとり、強力な物質の生産と使用に対し、国際的な管理を確立することが、適時にできなければ、人類はかつてなかった性格の危険に直面するであります。

破壊の新しい手段の所有を、秘密のうちに準備しようとすることを禁じて、安全を提供し得るいかなる措置も、覚書中で述べたように、並はずれた方策を必要とするでしょう。実際、科学的発見に関する全情報に、すべての人が近づき得るといえることが必要であるばかりでなく、工業的であれ軍事的であれ、すべてのおもな技術的事業が、国際的管理に対して閉じていてはならないであります。

これに関連して、つぎのことが何よりも著しい点です。すなわち、技術的改良の如何にかかわらず、アクティブな物質の生産に必要な努力が特殊であり、危

険な爆発物としてのその物質の使用を支配する状況が独特であることが、そのような管理を大いに容易にし、管理の効果を確実化することです。その実現のためには、監督権が保証されることだけが必要とされるのです。

効果的な管理を確立するための詳しい提案が、関係政府の任命した科学者と技術者によってなされるべきであり、国際安全保障組織に所属する常設専門委員会が、新しい科学的並びに技術的発展の記録をつづけて、管理手段の適切な調整を勧告する任務につくべきでしょう。

技術委員会からの勧告によって、国際安全保障組織は、どのような条件のもとでならば原子力エネルギー源の工業的開発が、アクティブな物質の爆発可能状態への組み立ての防止を十分に保障しつつ、許され得るか、その条件を判断することが出来るでしょう。」

「覚書の中で論じられているように、科学の進歩によって生じて世界事情の決定的瞬間に人類につきつけられている新しい状況に対抗するために要求されるこれらの方策が、将来の親密な国際協力への期待に、これほどよく適合しているということは、たいへん幸運なことであると思われまます。そのような国際協力への期待は、侵略に対抗して連合した諸国の中のすべての側が一致して表明しているものなのです。

その上に、事態がまったく新しいものであるために、偏見のない態度に訴える比類のない機会が得られることにもなろうし、またこの死活にかかわる事実を理解することが、歴史と伝統によって見解の不一致が生じている他の問題を解決するにも有利に貢献するでありましよう。

このようなより広い展望について言えば、共通の安全にとって必要な情報に自由に接し得ることが、種々の国における精神的並びに物質的生活状況の相互理解を妨げている障害を取り除くのに大きな効果をもつでしょう。その相互理解なくしては、諸国間の尊敬と善意が持続することはほとんど不可能であります。

国際的な科学協力によって大きく触発され、人間の幸福に関して絶大な潜在力をもっている開発に関与することは、戦前の年月中にいろいろな国の科学者の間に作られていた親しいきずなを、ふたたび強化することになりましよう。

現在の状況下にあつては、これらのきずなは、諸国政府が慎重に考えることおよび管理が確立されることに関して、特に役に立つものでありえましょう。

信頼感を呼び起こし、不安感をしずめることを第一の目的とする、政府間の予備的協議において必要なのは、もしも物理的科学的の進歩によって開けた見通しが、例外的な行動をとることを必要とする程度にまで現実化されるとき、各パートナーがとるであろう態度はどのようなものであるかという問題を持ち出すことだけであります。物理的科学的というものは、概要においてはどの国にも知られていることなのです。」

「どのような状況にあろうとも、協議仲間には協力することを誘われてそれを断つたばあいには生じる結果について考慮するためのゆとりが与えられ、そしてまた物質的繁栄の新しい源の有望な利用に誰の参加も排除せずにしかも共通の安全が保証されるような手段を講じることの有利さを確信するためのゆとりがあるばあいには、理解はかならず成立するであろうと思われます。

しかしながら、友好的な助言の精神で問題を論ずることが出来るうちにイニシアチブをとらなければ、そのような機会はすべて失われてしまうであります。実際、さらに開発が進むのを待つならば、殊に、もしその間になされる競争的努力の具体化が進んだ段階に達するばあいには、協議しようとしても、大国は到底受け入れるはずのないことを強制しようとする格好になるであります。」

「まったく、人間が手に入れることができた強力な破壊的な力を世界が知ると同時に、偉大な科学的技術的進歩が、諸国間の将来の平和的協力のために堅固な基礎を築くのに役立つとするならば、あらゆる点でいかに幸せなものであるかは、ことさら強調するまでもないことであります。」

これら昔の日々のことを回想するとき、科学の進歩が、諸国間の調和的協力に新しい時代をきり開くかも知れぬという熱い希望と、このような発展を促進する機会が失われはしまいかという心配とを、十分に生き生きと伝えるのは困難であります。

終戦に到るまで、私は一科学者として可能なあらゆる方法によって、プロジェ

クトにふくまれる政治的意味を完全に評価することの重要性を強調し、原子兵器の使用について、どんな問題も発生しないうちに、世界の安全に対する新しい脅威を取り除くための、国際的協力が始められるべきであると説くことに努めました。

私は、原子爆弾の最終試験が行われる以前の、1945年6月にアメリカを去り、英国にとどまり、そこで1945年8月に、兵器が使用されたという公式発表を聞きました。その後すぐに、私はデンマークに戻り、それ以来、軍事的なものであれ工業的なものであれ、原子力の分野におけるいかなる秘密のプロジェクトにも関係していません。

戦争が終わり、ほう大な数の人民に対する圧制の大きな脅威が消えたときには、全世界に計り知れない救いが感じられました。にもかかわらず、政治的状況は、不吉な予感に満ちていました。戦勝国間の見通しの相違が、平和を定着させる措置で生じた対立事項を、避けがたく悪化させて来ました。すべての側から述べられ、国連憲章にもられた将来の美りある協力についての希望とはうらはらに、相互信頼の欠除が明らかになりました。

情報の自由な国際的交流を制限する、新しく作られた障壁が、さらに不信と不安を助長しました。科学の領域について言えば、殊に原子物理の領域においては、安全上の理由から必要と考えられて、いまなお続けられている秘密と制限が国際協力を妨げ、世界の科学者の社会を別々の陣営に分断するまでにいたりしました。

あらゆる試みにもかかわらず、国連内での交渉は、原子兵器の危険を除去する方策について一致を得ることに、まだ成功してはいません。これらの交渉が実を結ばないことは、共通の関心事であるこのような生死にかかわる事項について、建設的な接近をするためには、より大きな信頼の雰囲気が必要であることを、何にも増してはっきりと示しています。

諸国間の相互関係にとって重要なすべての情報に対して、自由に近づき得ることなしには、世界政治の真の改善がなされることは、ほとんど想像すること

も出来ません。確かに、原子エネルギーに関する、国際的取りきめの重要な部分として、いくらかの相互公開性が考察されたとはいえ、このような取りきめに関する協定に道をひらくためには、公開性に向かって決定的な第一歩がふみ出されなくてはならないということが、ますます明らかとなりました。

軍時的準備も含めて、各国における社会的状況や技術的諸事業に関して、共通に知りあっている開かれた世界という理想は、現在の一般的世界状況においては、遙かに遠い可能性であると思われるかも知れません。しかしながら、文明の進歩のための真の協力には、諸国間のそのような関係が必要であるばかりでなく、そのような方向に向かおうと共同で声明することだけでも、世界の安全を促進する協調的努力の最も望ましい背景を作り出すであります。その上に、新しい技術的開発で先駆けている国は、価値のある情報を提供できることによって、全面的な相互公開性の直接的提案でイニシアチブを取るべき、特殊な地位にあるように思われました。

私は、これらの見解を、微妙な事項の公表はさしひかえつつ、アメリカ政府の注意を引くことが適切であると考えました。それ故に、1946年と1948年に学術的会議に参加するためアメリカを訪問した時にその機会を利用して、このようなイニシアチブをとることをアメリカの政治家に勧めました。すでに述べた議論のくり返しを含むことにはなりますが、ワシントンにおいて6月に行った会談の基礎資料として、1948年5月17日付で、米国務長官に提出した覚書を引用しましょう。それは、ここで論じている考えについて、より明確な印象を与えるのに役立つと思われます。

「最近の10年間の、社会的並びに政治的發展によって生じた、人間関係のいろいろな面に対する態度の、根深い食いちがいの結果、第2次世界大戦の終結にあたって、国際関係の容易でないひずみが現れねばなりません。戦時中には、共通の防衛努力が、このような食いちがいから注意をそらせていたのですが、一方、侵略に反対して団結し、真の信頼に基づいて心から協力した諸国民がこぞって歓迎した希望を実現するには、国際関係において根本的に新しい近づきかたを必要とする、ということが明らかとなりました。

人類の繁栄の増進に明るい見通しを与えたが同時に恐ろしい破壊手段を人間の手にゆだねた大きな科学的技術的発展は、このような関係の再調整の必要性を一層つよめたのであります。実際、これまでの技術的進歩は、一つの文明社会内での調整の必要性の認識をもたらしたのですが、それと同様に、これまでは国家的利益を守るのに必要であると従来考えられてきた国家間の多くの障壁が、今や共通の安全にとって障害となっているのです。

文明に対するこの挑戦がそれらの国家に対して最も深い共通の関心事を与えているという事実が、死活の問題に対して引き続いた協力を求めさせる比類のない機会を提供するのであります。したがって、相互の信頼を招く目的で早期にイニシアチブをとることによって後の発展のための好ましい基礎が作り出されるということが、すでに戦時中に、感じられておりました。それは、すべてのパートナーに対し、直面しなければならぬ現実の状況をさとらせることによって、そしてあらゆる側から要求されるであろう通例の国家大権に関する、大幅の譲りあいを率先して行う用意があることを保証することによって、なされるべきものでした。

戦後の数年間においては、見解の相違はかつてない程はっきりと現れ、そして現在の状況の全く絶望的な特徴は、交渉の途絶が事実と動機をゆがめるまでになり、不信と不安が国家間や多くの国家内グループ間でも増加するまでになった程であります。これらの状況下にあつては、国際連合の設立によつてもたらされた希望は、何度も大きな失望に直面し、ことに、原子力兵器の管理について、一致を見ることは出来ませんでした。

このように国家間の亀裂が深まり、未来についての不安が広がる状況下にあつては、これらの事態の流れを変えるためには、人類の最大の切望をよび出すための、大きな論点がかかげられるべきであると思われまゝす。そして一般的啓発と相互理解のための機会がなんら妨げられていない開かれた世界という立場が、そのような論点の背景となっていなければならないと思われまゝす。確かに、諸国間の尊敬と善意というものは、あらゆる国の生活のあらゆる局面について、情報が自由に手に入るということなしには、成り立たないものです。

その上に、技術的進歩に含まれている希望と危険とは、文明の進歩と保護の

ための第一条件として、公開性に向かって決定的一歩が取られるべきことを、最も強く強調しています。たしかに、この点の認識は、国連原子力委員会に提出された新資源開発に関する協力について規定している提案に含まれていますが、しかし今日の世界状態で合意を取りつけることの困難さは、論点をもっと直接的に公開性の問題に集中する必要を暗示していると言えます。

現在の状況では、相互的基盤の上に立つ公開性に直接役立つ方策の時宜を得た提唱によって生じるかも知れぬ結果について、最も深い注意がはらわれるべきであるように見えます。そのような方策は、いろいろな国の状況と開発に関して、必要とされる任意の種類の情報に近づくことを、しかるべき仕方ですすものであると、これによって、それらの国が直面している現実の状況に関して、適切な判断を下すことを相手に許すものであります。

このような方向でイニシアチブをとることは、通常の外交的配慮の圏外にあることのように思われるかも知れません。しかしそれでもやはり、もしも提案が同意されるならば、世界事情の根本的な改善がもたらされ、信頼に基づいた協力のために、そして共通の危険を除去する効果的方策に関する一致に到達するために、全く新しい機会がもたらされたであろうということを考えてみるべきです。

同意を得ることの困難さも、イニシアチブをとることに反対する論拠になるべきではありません。なぜならば、ただちに反応があろうとなかろうと、問題となっている種類の事について申し出があったということ自体が、事態を最も有望な方向へ向かわせることに深く影響するからです。実際、それは世界に対して、他のすべての人たちと共存しようという覚悟の一つのデモンストレーションになるでしょう。その状況のもとでは相互関係と共通の運命とは、正直な確信とよい実例で初めて形づくられるのです。

このような見地は、他の何ものにもまして、基本的人権のためにたたかっている世界中の人々に対してアピールし、また、心からの国際的協力を支持している人たちすべての、精神的地位を強めるであります。それと同時に、提案されたコースに加わりたくない人々は、その立場を維持することが困難になるでしょう。何故ならば、そのような反対は、全世界に公開されたばあいに、

彼ら自身の大義名分の強さに関して、信念が欠けていることを告白するような事態になるからであります。

要するに、公開性に関する要求を最高の論点とすることにより、全く新しい可能性が作り出されて、もしもそれが意識的に追求されるならば、文明の進歩の途上で、人類にあの協力の実現に向かう長い道程をもたらすでありましょう。その協力は、いつにもましてより緊急を要することであり、かつ現在障害が多いが、やはりより達しやすくもあり得るものです。」

この覚書中の考察は、ユートピア的に見えるかも知れません。そして、手続きが通常でないゆえに起こる紆余曲折が見通し難いために、完全な相互公開のコースに賛成を表明することを政府がためらうのも説明のつくことかも知れません。にもかかわらず、そのようなコースは、社会的並びに経済的組織の相違にもかかわらず、すべての国にとって深い関心事であるべきだし、覚書中で表現しようとした考えと熱望とは、疑いもなく全世界の人々の共有するところがあります。

世界状況の激変と技術的資源に関する真の革命とがかさなったことによってどの国も直面している困難について、この報告書は一般的認識をおそらく増したことでしょうが、状況は比類のない機会を提供しないということの意味するものでは決してありません。それどころか、この報告書の目的は、文明に対する致命的な脅威を避けるために、協力しあう方法と手段をおの側の側から再考する必要性を指摘し、科学の進歩をして全人類に永遠に恩恵があるように仕向けることにあります。

過ぐる数年間に、全世界的な政治の発展は国家間の緊張を強めると同時に、大国が広い地域の住民をほろぼしたり、地球の一部を一時的にしる居住不能にさえできる手段の所有をめぐる、競うかも知れぬという見通しが、広範な紛糾と恐慌の原因となりました。

原子力資源によって文明の物質的条件を改善するという見通しを拒絶することは、人類にとってほとんど問題となり得ませんが、それとともに、もし、文

明が生き残るべきならば、国際関係の根本的調整が避けられないことは明瞭であります。ここで肝要なのは、つぎの事です。科学の進歩が人類の幸福のためにのみ利用されることの保証は、諸国間の協力が文化の全領域で行われるために必要とされる態度と同じものを前提とすることにあります。

科学の他の領域でも最近の進歩は、原子物理学の進展がもたらしたと同様の事態に我々を直面させています。全世界の民衆の健康に輝かしい約束を実現した医学的科学的でさえ、世界的な相互の信頼と責任とを堅固に樹立し得ない時には、文明にとって由々しい脅威となり得るような大規模な殺戮方法を創り出してきました。

事態は国際関係をめぐるあらゆる問題に対する最も偏見のない態度を要求しています。世界市民という概念の意味する義務と責任を正確に認識することが今日ほど必要なことはかつてなかったことです。一方では、科学や技術の進歩がすべての国の運命を分かち難く結びつけており、また一方では各国の自己主張と社会的発展のための活発な努力が、地球上のさまざまな場所で最も性格の相違した文化を背景に行われているのであります。

共同の文化に貢献でき、経験と資源とをもって他を助けることができるという点でのみおのおのの国が自己を主張できる公開的な世界は、何にもまして達成しなければならぬ目標であります。なおまた孤立政策が放棄され、文化的ないし社会的発展についての自由討議がすべての国境を越えて行われるときに、初めてこのような点でのよい例が効果的になり得るのであります。

どのような社会においても、市民が、国の中での共通の繁栄のために一致して努力することは、一般的状況について皆が知っていてこそ、初めて可能なのであります。同様に、国と国のあいだで、共通の関心事について真に協力することは、それらの国の関係について重要な情報を、自由に入手できるということを前提とするのであります。国家的理想あるいは利害に関する考慮に基づいて、情報と交流とに対する障壁を維持しようとするどのような議論も、公開性によってもたらされる緊張の緩和と一般的啓発とによる有益な効果と比較して考え直さねばなりません。

個人の生活と、社会の組織との間で、調和のとれた関係を求めることについ

ては、熟考すべきたくさんの問題と、遵守すべき原理とがいつも存在して来たり、これからも存在するであります。しかしながら、国が他の国の経験から利益を得たり、他の国の意図を互いに誤解することを避けたりするためには、情報に自由に近づくことができ、考えを交換する機会が妨げられないということが、あらゆる場合に認められなければなりません。

このことに関して、以下のことが認められるべきであります。すなわち、障壁を廃止するということは、新しい社会体制が一時的隔離状態のもとで作られつつある国にあっては、政府組織の点でも国際的接触の点でも、長い伝統をもつ国においてよりも、より大きな行政的慣例の変更を意味するであろう、ということです。したがって、このような類の困難さを全人民が乗り切るのを助ける用意をすることが、最も緊急に必要とされています。

技術の進歩は、いまや交通手段が全人類を協力する一つの単位とすることができるほどになり、それと同時に、関連した全情報に対して自由に近づき得るという基礎に立つ協議によって国際的離間が解決されるのでない限り、文明に対する致命的な結果が起こるといふほどの段階に達しているのであります。

知識は本来文明の基礎であるという事実は、まさに公開性こそ現在の危機を乗り越える唯一の方法であることを示しています。結局はいかなる司法的および行政的な国際的權威が、世界事情を安定させるために作られるにしても、相互の完全な公開性のみが、信頼を効果的に高め、共通の安全を保証するものであることが認識されなければなりません。

我々の知識の領域が広まれば、それだけ人間の生活の条件を作り出すいろいろな可能性のゆえに、より大きな責任を各個人と各国に対し負わせるのであります。我々が今日受けているこの点に関する強力な警告は、放置しておくわけにはゆかないものであり、それは我々の全文明が直面している挑戦の深刻さについて、共同の認識に到らせずにはおかないものです。まさにこの背景のゆえに、人間の文化のあらゆる面の進歩のために、諸国間の協力を促進する全く比類のない機会が、今日存在するのであります。

私は、これらの考察を国連にあてて呈するにあたり、国連は人類が遭遇している、重大かつ緊急な問題に対して、現実的な近づきかたを探し求めることに貢献するであろうという希望をもっているものであります。ここで述べた議論は、自由な情報交換と交流の障壁を取り除くためのイニシアチブを、いずれの側がとろうとも、それは現在の行きづまりを打開するためにきわめて重要であり、同じような方向に向かって他の側も措置を取ることを力づけるものであります。個人であれ国であれ、国際協力を支持するあらゆる人々の努力によって、すべての国において、ますます増大する明瞭さと力強さをもって、開かれた世界を求める要望を支持する世論が作り出されることが必要でありましょう。

コペンハーゲン、1950年6月9日

ニールス・ボーア